

平成 24 年度八大学工学系連合会博士学生交流フォーラム

報告書

作成：東京工業大学実行委員会

【開催日】平成 24 年 11 月 9 日 13 時～10 日 12 時

【場所】多摩永山情報教育センター

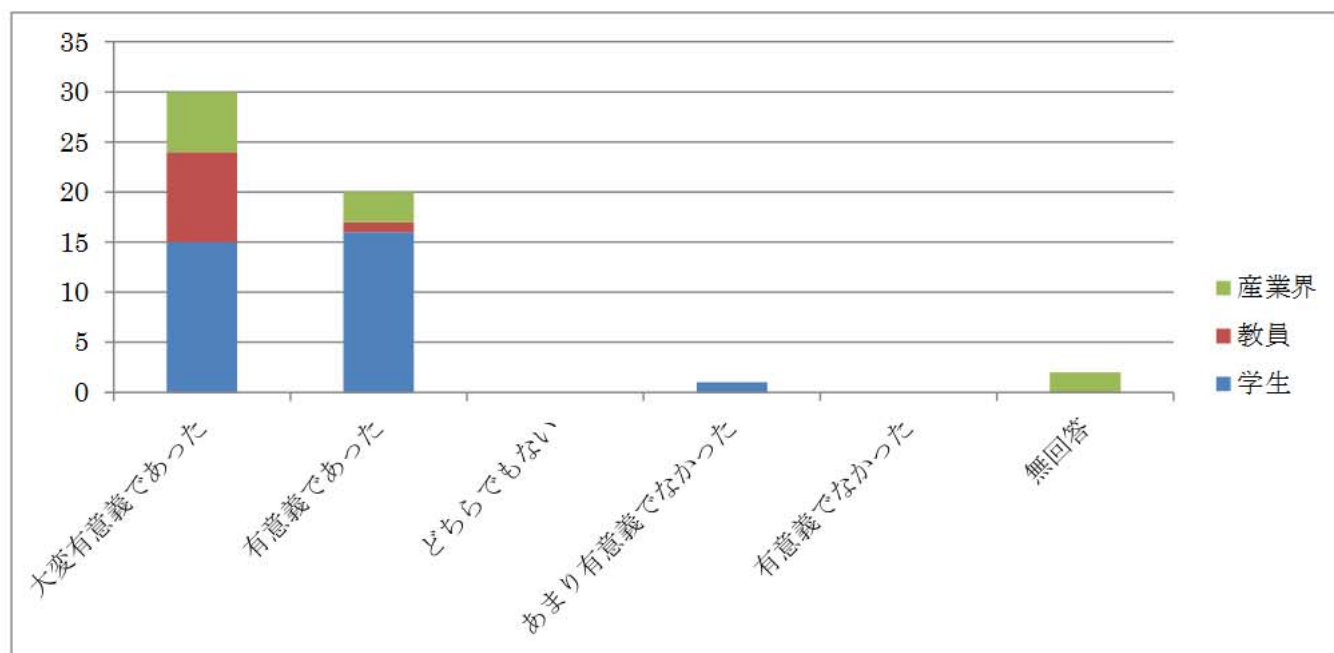
【主催】八大学工学系連合会

【参加者】産業界 11 名，教員 12 名，学生 38 名，合計 61 名

【テーマ】「博士と大学と社会と」

上記の要領で平成 24 年度八大学工学系連合会博士学生交流フォーラムを開催し，無事終了した。閉会時に回収したアンケート集計結果は以下のようになり，参加者の大多数が有意義であったという感想をもたれたことから，本フォーラムは成功したといえるのではないかと。今回は，次年度，それ以降への引き継ぎの観点から，次年度幹事校である京都大学の博士課程 1 年次，2 年次の学生に比較的多く参加していただいた。本会の反省をもとに，次年度以降さらに発展するよう願う次第である。参加者を含め，本会をサポートしてくれた全ての方々に深く感謝する。

八大学工学系連合会博士学生交流フォーラム 学生実行委員長
東京工業大学大学院 創造エネルギー専攻博士課程 3 年 川口卓志



アンケート集計結果

第一日目 - 11月9日 (金曜日)

受付 : 12:00 - 13:00

開会の挨拶 : 13:00 - 13:10

原田会長より開会の挨拶をいただき、学生幹事よりポスターセッションその他の説明を行なった。

ポスターセッション : 13:10 - 14:45

概要 : 参加した学生 38 名が 19 名ずつの 2 グループに分かれ、1 分間ずつの自己紹介と各人の研究紹介を交え、前半後半それぞれ 45 分間のポスターセッションを行なった (A グループ 13:10 - 13:55, B グループ 14:00 - 14:45)。参加者は投票用紙に、①説明のわかりやすさ、②図や表、ポスター自体の見やすさ、③研究にたいして興味をひくような工夫がされているか、の観点から二票を投じ、最優秀ポスター賞と優秀ポスター賞をそれぞれ選出し、賞品とともに表彰した。

参加者の声 :

(産業界) ポスターセッションの時間をもっと長くしてほしい (今回の 2 倍)

(産業界) 異分野の人に伝える工夫をもっとあるべきだと感じました。体裁はよく整えられていて見やすいのですが、何を伝えたいのかが判り難い。学会での発表ではないので誰に何を伝えるのかという視点をもっと養ってほしいと思います。博士に求められるスキルの一つです。

(学生) ポスターを全部見られなかったのは残念だった。ポスター、ディスカッションともに時間的余裕があるとよい。

(学生) ポスター発表の時間が欲しい

(学生) 全体的にスケジュールがタイト (特にポスターセッション)

基調講演 : 15:00 - 16:20

開会の挨拶 : 八大学工学系連合会 原田昇会長

概要 : 八大学工学系連合会会長東京大学原田昇教授より博士学生交流フォーラムの意義などについてプレゼンテーションをしていただいた。

基調講演者 : 文科省高等教育局大学振興課大学改革推進室大学院係長 立松慎也様

概要 : 現在の博士課程に対する、国の位置づけ、期待、方針などについてご講演いただいた。特に、グループ討論の際の資料になればという立松係長のご配慮から、有益な資料をご準備していただき、グループ討論時に参考になったという声も多い。博士課程に属していながら、目新しい事実が多く、大変参考になった。

(参考 : 講義録別添 1)

基調講演者：首都大学東京人文科学研究科 西山雄二准教授

概要：立松係長には現在の国の博士課程や大学院の位置づけなどについてお話をいただき、もう一人の講演者である西山先生には、歴史的、哲学的な時空を超えた次元でのお話をいただいた。歴史的な視点で大学を見ると、今日の大学に対する捉え方を相対的に見ることができ、大変有意義であった。末尾には大学のこれからの在り方について、ご提案をいただき、とくに硬直しない流動的な大学であるため、開かれた大学であるために、「大学とは旅である」との印象深い言葉で締めくくられた。

(参考：講義録別添2)

参加者の声：

(教員) 文部科学省の方の講演について学生が的を得た意見(現場との乖離)を述べていた。文部科学省と学生とのディスカッションの場(一時間程度)を設定してはどうだろうか。

(学生) 文科省のデータはディスカッションで大変有用であった。西山先生の話は、今の大学というものとの捉われ方が普遍的でない意識するきっかけになり、とてもよかった。

グループ討論①：16:30 – 19:00

概要：参加者(産業界、教員、学生)を8つのグループに分け、下記のテーマでグループ討論を行なった。各グループは二日目に話し合った内容をまとめ、それぞれ発表することを意識して議論を進めてもらった。

博士課程の存在意義 Aグループ、Bグループ

大学における教育のあり方 Cグループ、Dグループ

大学の存在意義 Eグループ、Fグループ

博士号取得の意義 Gグループ、Hグループ

夕食・懇親会：19:00 – 21:00

参加者の声：

(産業界) 懇親会では塊ができていく傾向があったので(学生どうしとか)少しグループ分けするなど工夫している色々な方と話せる仕掛けがあると良いのではないかなと思う。

(産業界) 学生さんはポスターセッションの説明で自己紹介があったので産業界、教員の方にこの時間を利用して自己紹介をして頂くとよかったのではないのでしょうか。

(教員) 学生、教員、企業、それぞれの立場からの素直な意見を聞くことができた。

(学生) 様々な分野の人の話を聞いた事が良かったです。

(学生) 他分野の方との交流・意見交換の機会は貴重であります。

(学生) 博士同士の交流が出来て刺激になった。先生や企業の方と建前抜きの話が出来て今まで漠然とイメージしていたことがもう少し具体的にイメージできるようになった。

第二日目・11月10日（土曜日）

グループ討論②：8:00－10:00

概要：一日目の議論をまとめることに主眼をおき，グループ討論を進めた。

テーマごとに発表：10:15－11:45

概要：各グループで5分の発表，5分の質疑応答，計10分に対応する。発表形式は自由であり，ホワイトボードを用いたり，模造紙を用いたり，またプロジェクターを用いた一般のプレゼン形式によって発表した。

博士課程の存在意義

Aグループ：産学官がそれぞれ求めている博士像が異なるばかりでなく，さらに基礎と応用などの文脈でも捉え方が違う。分野によって「T」型，「I」型，または「II型」が求められる。博士課程では，その先のキャリアも考えたうえで，どのような類型を各自が持つべきか，早い段階から「なりたい博士像」を持つことが重要であり，また社会も「もともとたい博士像」を明示するべきである。博士課程は他分野の研究に対する理解を深めるため，また他分野とのコーディネートマネジメントを行なう素養を身につけるために重要である。

Bグループ：博士課程は必要である。課程博士は研究遂行能力，本質的理解を追求できる過程であると考えている。企業では目的が与えられていて，博士課程と比べると自由がない。その本質を追究するために必要な課程であり，またそれによって他分野への理解が深まるはずである。

大学における教育のあり方

Cグループ：大学の多様性を今以上にもっと強調されるべきである。大学教育は，演繹的な知識を身につけ，また帰納的な体験をさせる，その狭間にある。大学教育はその両者をうまく組み合わせ，配合させることで，学生は研究が「すげーたのしく」なる。極端になり兼ねない方向付けを，両者のバランスのよい向きに調整するやくわりを担うことが大学の教育の在り方だと考える。

Dグループ：現在の大学は，就職予備校にすらなっていない。（文科省の資料から）企業が求めることを博士論文研究で得られることは一致している。博士では一極集中一点突破型の人間はたくさんいる。それを補い合える仕組みが足りない。そのため，他分野との交流がさらに大事である。

大学の存在意義

Eグループ：西山先生の発表を受けて，大学の存在意義は本来，個人の好奇心を満たしたい，議論をしたい，社会の問題をなんとかしたい，または各人の向上心など，個人の欲求を満たすために存在していたものであり，社会への貢献はその副産物であったはず。しかし，いつからか，大学はその副産物によって自己規定してしまい，昨今の大学は社会貢献を意識しすぎている感が否めない。やはり，本義としての個人の欲求，知的好奇心を満たすことも忘れてはならない。

Fグループ：大学は研究機関であり、同時に教育機関である。この両義性が故に企業とも国立研究所とも異なる。大学は優れた学生を輩出するためにその存在が必要であり、学生は研究課題に取り組むことで問題解決力を身につけていく。しかし、基礎学力をつけさせたい大学と、単位や就職のことしか頭のない学生との間に齟齬があり、その隙間をうめることが大事である。そのために、単位取得を難しくしたり、進級試験を追加したり、大学院試験の早期化などを行うことで、基礎学力、研究活動を充実させることや、定員を削減することなどの対策も考えうる。

博士号取得の意義

Gグループ：「博士号」について、個人と社会との視点で、それぞれメリットとデメリットをまとめた。そこで露呈した問題は、博士号取得者および博士課程の学生と、社会の「博士号」の認識の乖離である。「博士号」取得者は、社会的にもう少し発言力、影響力をもっても良いと考える。そのために、博士号のデータベース化や、倫理憲章を規定し、そのうえで政治結社などの社会に対して発言していく機関を創ることも視野にいれるべきだ（日本医師会などのように）。

Hグループ：ワーキングプアの問題は一般的な問題であり、高学歴者に限った問題ではない。博士課程において、自ら仕事を創ること、ひとつのことを最後まで極めること、企業同様の経験が課程のなかでおこなわれている。しかし、学生側と企業の相互理解が不足している感があるため、その歩み寄りが重要である。その対策として、企業との共同での研究を増やすなどが考えられる。

参加者の声：

(産業界) 小グループ (4~5人) の学生による討論で内容が深堀りできていた。

(産業界) 博士課程に学ぶ人達自身が博士とは何か、どうあるべきか、社会の中での位置づけなどを改めて考える良い機会になったと思います。

(産業界) 学生達の考えを知ることができ、産業界問題を再認識できた。自己の中に閉じこもらず、開かれた博士 (?) を目指して今後の人生設計に生かせることを望みます。

(教員) 毎回の議論はすばらしい。しかし、拠点、博士フォーラムを含めて、議論の継続性がないことが残念である。テーマの継続性張るように思うので、各年 (毎回) の議論をアーカイブ化すれば、次年 (翌年) のグループがある程度議論の前提を理解することが理解できるのではないか。

(教員) 他大学、異分野の教員、学生との交流は刺激的であった。学生にとっても自分を再発見する場になったと思う。グループディスカッションも有意で、さすが 8 大学の博士学生と感心した。

(教員) 事前に参加者にテーマを与えて、少し予備的に考えてくるようにしたらどうか？

(教員) 研究内容をはなれ、少し難しい課題について意見を交換するというのは、大学のカリキュラムに取り入れてみたいと思いました。得に、短時間の間に意見を集約する行程は、非常に有意義に思えました。また、普段ふれることができない学生の皆さんの考えを聞くことができ、教員としても大変参考になりました。

(学生) 大学は副産物で発展しすぎたという考え方は面白かった。

- (学生) とても楽しかった。学外かつ分野違いのドクター生がどのようなことを考えているのかが分かって面白い。博士同士のディスカッションのレベルが高い(皆が積極的、場をリードする人が定期的に変わる)など
- (学生) 普段考えることの少ない、あるいは言葉にしてまとめることの少ないテーマについてディスカッションを通じてまとめ、確認を行うことができ、モチベーションを高めることが出来た。
- (学生) 普段あまり議論することのないテーマに関して徹底的に議論できる場を設けてとても有意義でした。自分の大学に戻ってもこのような議論を積極的にできるようにしたいです。
- (学生) 研究室にいただけでは決して話せないような議論が出来て非常に有意義でした。自分にはない発想・意見を聞くことが出来て、博士課程に対する考え方・意識をさらに高めることが出来ました。こういった取り組みがぜひ今後も存続していただきたいと思います。

交流会全体への参加者の声

- (産業界) 学部生/博士前期(修士1年)の参加を考えるべき ∵博士課程への意識付け
- (産業界) もう少し若手の方(企業)増やして意見を取り込んでも良いと思う。
- (産業界) 今後このような会が続いていき、横のネットワークが繋がっていくことを期待します。会場の都合上仕方ないのかもしれませんが、時間を有意義に使いたいので会場移動は最小限にしたいです
- (産業界) 女子学生の参加を増やすべき
- (産業界) 博士の学生が現在何を考えて、どんな意識を持っているのかがわかった。という個人的なメリットとは別に自分の専門以外の人間に伝える、そして交れるという”場”として有効だと思った。ただ、一方で自分の未来に対する意識は全体的に低く、現状に向き合うことが課題のほとんどになってしまっていることが、残念であった。
- (教員) 異なる大学環境、異分野の学生間の交流に基づく大学の内部では得られない刺激を学生たちが受けたであろうことは評価できる。しかし同時に、本取り組みのコストパフォーマンスも検討すべき時期かもしれない。
- (教員) 八大学でなければできないテーマ設定(個別の大学ではできない)。フォーラムで終わらないしかけをつくる。
- (教員) 学生の交流会費がもう少し安いといいと思います。先生を高くして。
- (学生) 東北大学の場合、大学内にフォーラムに関しての周知が不十分だったと思います。参加は有意義なのでもっと博士の学生に周知されても良いと思いました。私の場合は指導教員に言われて参加しました。
- (学生) 拠点セミナーと異なり、多くのアドバイザーのお話を聞くことができた。初めてお会いする方々との交流を持てた。個々の意識の高さに触発された。
- (学生) 博士同士の交流が出来て刺激になった。先生や企業の方と建前抜きの話が出来て今まで漠然とイメージしていたことがもう少し具体的にイメージできるようになった。
- (学生) 時期が悪い。博士論文執筆中に時間をとれない。

【後記】

今回のテーマ設定は「博士と大学と社会と...」という自分たちの立脚地について考える場が欲しかったことから、基調講演者、グループ討論のテーマを選出した。参加者の中には、そんなこと考える「意味」がない、そんなことを話したって「役に立たない」という批判も各所にみられたが、自己批判の視座を持たない文明は危うく、そのような国において本質的な発展の道は閉ざされていると考えている。今回、実行委員会としては、それなりに筋の通った納得のいくシナリオを設定できたと思っている。当日バタバタしてしまい準備不足が目立ってしまったが、これは偏に実行委員長の能力不足と情報共有の不十分さであり、周囲に迷惑を掛けてしまったことをお詫び申し上げる。

あらかじめ設定されていた本来のフォーラムの目的は、「次代を担う博士課程の学生たちの人材育成、産学官の対話の促進、対外的なメッセージを発信していく」ことだと謳われているが、二日間（時間的には丸一日）でこの目的に寄与することは学生実行委員会の手に余ることは目に見えていたことであつたし、対外的な情報発信にも異論があり限定的であつた。そのため、少なくとも参加者の交流が自然に発展するような会に可能な限りすることだけを心掛けた。最終的に功を成したと信じている。しかし、学生主体という体裁はありながらも、各方面から様々なご鞭撻をいただき過ぎて、学生実行委員側が最終的に耳をふさいでしまった形になってしまった。学生主体であれば、悠々自適に放っておくのが好かろうとおもう。ただ、教員幹事の水本教授、扇澤教授には、学生の自由を最大限認めていただいたことが我々には心強かつたし、実行委員一同とても感謝している。

基調講演者の立松慎也係長、西山雄二准教授には、我々実行委員会の意図を的確に汲んでいただき、大変有意義な基調講演になった。この場をお借りして深謝申し上げます。参加各位には、事前に情報の共有がスムーズにならず、大変な迷惑をお掛けした。しかしながら、当日は学生参加者各位のあふれる才気英知に、今後の日本の光明をみた。この交流会が一つ二つの未来の萌芽を育んだとしたら、我々も救われた思いである。最後に、気が進まない仕事も多々あったとは思うが、学生実行委員の田代さん、坂東君、織江君、鏑木さん、畠山君が最後まで一緒に活動してくれたことへの感謝は、本当に辞に尽くしがたい。どうもありがとう。

別添1 基調講演講演録

講演題目：大学院教育改革と博士課程修了者への期待

講演者：文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室大学院係 立松慎也係長

<講演概要>

平成3年に制定された大学院重点化政策により、大学院の進学率は大幅に上昇した（終戦直後の学部進学率と同等程度）。しかし他の先進国と比べると、数の上でも人口当たりの比率においても、日本の博士号取得者は多くない。また、近年日本の博士課程進学者は減少傾向にある。これらの原因として、博士課程学生に対する経済的支援の問題が挙げられる。アメリカと比べると、日本ではRAなどの給付型支援の支給額が少なく、経済的支援のない学生の割合も多い。このように日本の博士を取り巻く状況は楽観できないが、世界的に見ると博士号取得者は一定の割合で企業の研究職や管理職に就いている。つまり、グローバルに活動する企業や研究機関等は、国籍を問わず優秀な博士人材の獲得のために動いている。そのため、日本も博士人材の育成や人材流出の防止により一層力を入れなければならない。

大学院の設置基準や博士課程の修了要件は法令によって定められている。一方で、博士号取得者を取り巻く環境は変化し続けており、その変化に対応するために博士人材の教育と研究の支援を重要課題と位置付け、様々な政策が策定されてきた。一例として、平成23年度にスタートした「博士課程教育リーディングプログラム」が挙げられる。この教育プログラムでは、学生が博士課程を終了した後の活躍の機会を広げるため、リーダーシップや国際性、問題解決力といった能力の養成を試みている。実際に、8大学連合に所属する各大学では、1件～複数件のプログラムが採択されている。また、将来の日本を担う大学院生の人材育成を産学官の連携により支援する「産学協働人材育成円卓会議」も平成23年に立ち上がった。アクションプランが策定され、大学のグローバル化の推進や大学院生の研究・教育資金の拡充への取り組みが期待される。

最後に、日本の基礎研究や先端研究を支えている博士研究員のキャリアの現状について言及があった。博士課程修了後のキャリアとしてポストドクターを選ぶ研究者は多く、キャリアパスが多様であるとは言い難い。実際に、ポストドクターの総数は平成21年の時点で約15,000人である。このような背景から、ポストドクターのキャリア支援を目的とした「若手研究人材の育成・支援プラン2013」が策定された。具体的には、「女性研究者研究活動支援」のように他の政策と共同の取り組みや、「リサーチ・アドミニストレーター育成」のように新しい職種の創設と育成などの試みがある。

講演後、「日本と海外とで博士課程の学生・修了者の資質等に違いがあるのか？」という質問が出た。「博士人材の質は根本的に同程度である。強いて違いを挙げるなら、日本の学生は専門性が高く、海外の学生は教養が豊かで博識な傾向にある」との事だ。

別添2 基調講演講演録

講演題目：大学の原像——中世と近代における大学の誕生から

講演者：首都大学東京人文科学研究科 西山雄二准教授

<講演概要>

大学の起源は中世にまで遡る。13世紀初頭、教師と学生の組織団体として初期大学が自然発生的に誕生した。オックスフォード大学がその代表例である。この初期大学は、相互扶助のシステムを持つ商人や手工業者の同業組合（ギルド）に似た組織体系を取っていた。また、領主や教会などの権力機関と一線を画す自律した存在であった。その後、「自然発生型」の大学の他に、オックスフォード大学から分離独立したケンブリッジ大学のような「移住型」の大学や、トゥールズ大学のように権力者が開設した「創設型」の大学なども誕生した。移住型の大学は専用の建物を所有せず、教会や修道院で授業を行った。そして、当地の権力との対立が生じると自主的に拠点の移動を行った。

学位が発明されたのも中世である。1233年に教皇がトゥールズ大学に与えた学位授与権が起源となっている。学士号・修士号・博士号は時間を超越して全世界で通用する社会資本となり、大学の制度が確立した。そして、学位取得者が様々な地域・職域で活躍したため、大学はギルドとは性質の異なる組織に進化した。大学が国籍や身分を問わない一般的な共同体となったのである。

近世に入り大学が定住して学問が成熟すると、研究と教育の関係性が大学運営における重要課題となった。自由に学問を探究する研究活動においては、カリキュラムを強制する教育のみを行う教師は不用であり、学生も単なる学習者であってはならなかった。つまり、教師も学生も学問を探究するための存在でなければならなかった。しかし、決められたカリキュラムをこなした上で、学問探究に主体的に勤しんだ学生は多くなかった。そのため、研究機関と教育機関の分離の必要性も説かれたが、現代の大学では両者の境界が曖昧になっている。上述した問題構造は現代にも残存し、大学の就職予備校化などが問題となっている。

また、従来は権力から自由であった大学も、組織の拡大により権力構造に組み込まれていった。現在の教養学部に対応する下級学部は、自己検閲と自己批判を行う自律的な組織であった。一方、現在の医学部・工学部・法学部など（実学）にあたる上級学部は、国家権力による検閲や批判を受け入れていた。そのため、両者が同じ組織に属することで学内抗争も生じた。カントはこの問題構造に対し、下級学部（哲学）は上級学部との学術交流を断ってまで争うべきではなく、学問を通じて権力と争い自らの学問の自由を確立すべきであると説いた。

大学が機能的にも組織的にも巨大化した今日では、「大学とは何か」を問う事は困難になっている。しかし、大学が「根源的な知識欲」を充足するための存在である事に変わりはないはずである。大学と学生が新自由主義による熾烈な競争に晒されている現在、大学の存在意義を見失わないためにも「今の状況は大学のあるべき姿ではない」という問題提起が必要である。

講演後、「現在の物理学や工学は哲学の理論を元に進展した経緯がある。学問が複雑化して習熟が困難な現在こそ、文系の学生は理系の教養を、逆に理系の学生は文系の教養を深める事が、学問の進展と社会問題の打破のために不可欠である」との提案が出た。

平成 24 年度八大学工学系連合会博士学生交流フォーラム報告資料

世話校：東京工業大学

【開催日】平成 24 年 11 月 9 日(金) 13 時～10 日(土) 12 時

【場所】多摩永山情報教育センター

【主催】八大学工学系連合会

【参加者】産業界 11 名，教員 12 名，学生 38 名，合計 61 名

(次年度世話校である京都大学：博士 1・2 年生の学生を中心に 7 名の学生が参加)

【学生実行委員】(委員長)川口卓志 他 5 名 (東京工業大学)

【テーマ】「博士と大学と社会と」

【グループディスカッションのテーマ】

(A)(B) **博士課程の存在意義**

問題意識：「博士課程」は必要とされているのか？

(C)(D) **大学における教育のあり方**

問題意識：大学・大学院は、「会社」で必要とされる人間を教育する就職予備校的な場なのだろうか？

(E)(F) **大学の存在意義**

問題意識：大学・大学院は本当に必要か？

(G)(H) **博士号取得の意義**

問題意識：高学歴ワーキングプア製造過程「博士課程制度」と博士号

【基調講演】

① 基調講演者：文科省高等教育局大学振興課大学改革推進室大学院係長 立松慎也様

概要：現在の博士課程に対する、国の位置づけ、期待、方針などについてご講演いただいた。特に、グループ討論の際の資料になればという立松係長のご配慮から、有益な資料をご準備していただき、グループ討論時に参考になったという声も多い。博士課程に属していながら、目新しい事実が多く、大変参考になった。

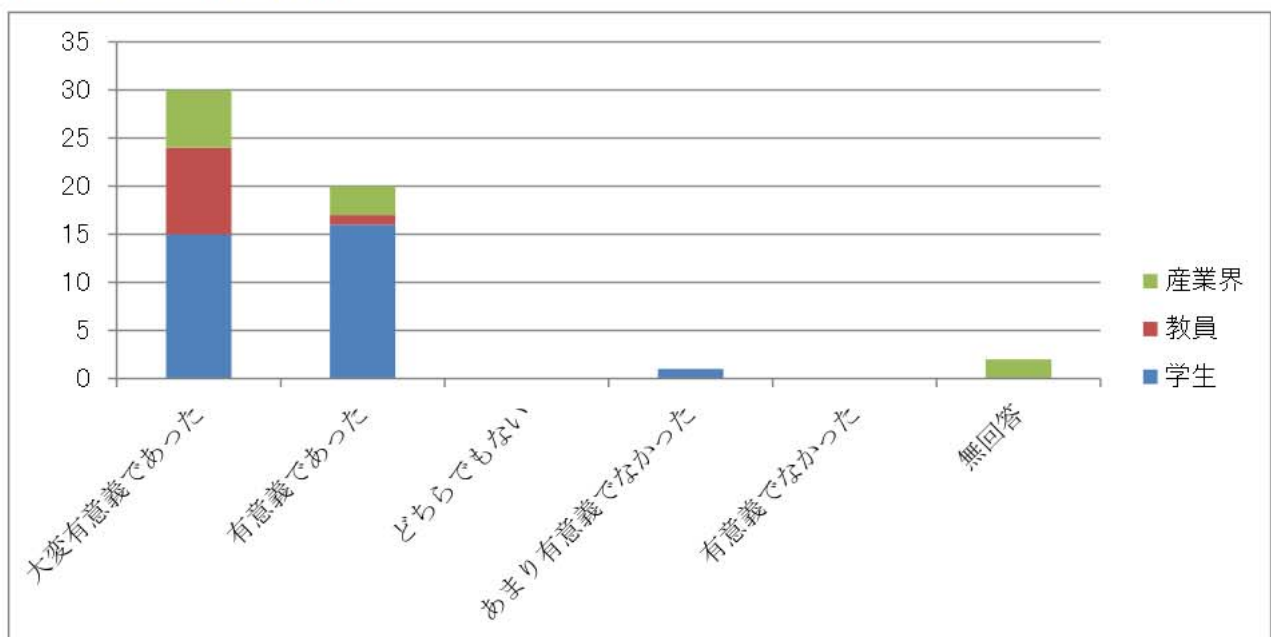
② 基調講演者：首都大学東京人文科学研究科 西山雄二准教授

概要：立松係長には現在の国の博士課程や大学院の位置づけなどについてお話をいただき、もう一人の講演者である西山先生には、歴史的、哲学的な時空を超えた次元でのお話をいただいた。歴史的な視点で大学を見るとき、今日の大学に対する捉え方を相対的に見ることができ、大変有意義であった。末尾には大学のこれからの在り方について、ご提案をいただき、とくに硬直しない流動的な大学であるため、開かれた大学であるために、「大学とは旅である」との印象深い言葉で締めくくられた。

全体スケジュール		場所	
11月9日(一日目)	12:00 - 13:00	受付	あゆみ
	13:00-13:20	挨拶と事務連絡: 学生幹事 開会の挨拶: 東京大学工学系研究科 研究科長 教授 八大学工学系連合会 原田 昇 会長 ポスターセッション説明: 学生幹事	
	13:20-14:05	ポスターセッション A: グループ A (ポスター番号 奇数組) ポスター説明と自己紹介	
	14:10-14:55	ポスターセッション B: グループ B (ポスター番号 偶数組) ポスター説明と自己紹介	
	14:55-15:10	会場移動 / 休憩	
	15:10-15:45	<u>基調講演①</u> 文科省高等教育局大学振興課 大学改革推進室大学院係長 立松 慎也 様	605 + 606
	15:45-16:20	<u>基調講演②</u> 首都大学東京 人文科学研究科 西山 雄二准教授	
	16:20-16:30	グループ討論場所に移動 / 休憩	
	16:30-19:00	<u>グループ討論</u> (グループごとに適宜休憩をとりながら進めてください)	202 (G) 203 (H) 405 (B) 406 (D) 407 (F) 605 + 606 (A) (C) (E)
	19:00-21:00	<u>夕食 / 懇親会</u> ポスター賞発表・賞品授与	あゆみ
	21:00-21:10	<u>各グループで集合時間などを確認</u> <u>ポスター片づけ (各自)</u>	各所
	21:10-24:00	<u>自由時間(門限 24 時)</u>	各所

11月10日(二日目)	6:00-8:00	各自朝食を済ませてグループで集合 (チェックアウトを済ませ、荷物持参)	
	8:00-10:00	グループ討論 (発表のために結論をまとめてください グループで一人発表者を選出しておいてください)	201 (A) 601 (C) 602 (E) 603 (G) 604 (H) 205 (B) (D) (F)
	10:00-10:15	会場移動 / 休憩	
	10:15-11:45	テーマごとに発表, 討論 (各グループ5分発表, 5分質疑)	205
	11:45-11:55	閉会の挨拶: 東京工業大学電気電子工学専攻 水本 哲弥 教授	
		全体写真撮影 / アンケート回収 解散	

【アンケート 集計結果】



【グループ討論に関する参加者の声】(抜粋)

- (学生)とても楽しかった。学外かつ分野違いのドクター生がどのようなことを考えているのかが分かって面白い。博士同士のディスカッションのレベルが高い(皆が積極的、場をリードする人が定期的に変わる)など
- (学生)普段考えることの少ない、あるいは言葉にしてまとめることの少ないテーマについてディスカッションを通じてまとめ、確認を行うことができ、モチベーションを高めることが出来た。
- (学生)普段あまり議論することのないテーマに関して徹底的に議論できる場を設けてとても有意義でした。自分の大学に戻ってもこのような議論を積極的にできるようにしたいです。
- (学生)研究室にいただけでは決して話せないような議論が出来て非常に有意義でした。自分にはない発想・意見を聞くことが出来て、博士課程に対する考え方・意識をさらに高めることが出来ました。こういった取り組みがぜひ今後も存続していただきたいと思います。
- (産業界)小グループ(4~5人)の学生による討論で内容が深掘りできていた。
- (産業界)博士課程に学ぶ人達自身が博士とは何か、どうあるべきか、社会の中での位置づけなどを改めて考える良い機会になったと思います。
- (産業界)学生達の考えを知ることができ、産業界問題を再認識できた。自己の中に閉じこもらず、開かれた博士(?)を目指して今後の人生設計に生かせることを望みます。
- (教員)毎回の議論はすばらしい。しかし、拠点、博士フォーラムを含めて、議論の継続性がないことが残念である。テーマの継続性張るように思うので、各年(毎回)の議論をアーカイブ化すれば、次年(翌年)のグループがある程度議論の前提を理解することが理解できるのではないか。
- (教員)他大学、異分野の教員、学生との交流は刺激的であった。学生にとっても自分を再発見する場になったと思う。グループディスカッションも有意で、さすが8大学の博士学生と感心した。
- (教員)事前に参加者にテーマを与えて、少し予備的に考えてくるようにしたらどうか?
- (教員)研究内容をはなれ、少し難しい課題について意見を交換するというのは、大学のカリキュラムに取り入れてみたいと思いました。得に、短時間の間に意見を集約する行程は、非常に有意義に思えました。また、普段ふれることができない学生の皆さんの考えを聞くことができ、教員としても大変参考になりました。

【UCEE ネットのからの支援と意義】

- ・プログラムの企画支援(実行委員学生への動機付け、討議テーマ等の検討支援)
- ・産業界アドバイザーの手配
- ・フォーラム当日の支援(ポスターセッションにおける質疑、グループ討議での助言)

【UCEE】2012年度博士フォーラム支援報告

2012/1/18 UCEE ネット 運営委員会

1. UCEE ネットによるフォーラム支援の目的

UCEE ネットは、過去のフォーラムへの参加・支援の経験、および UCEE Cafe 等の学生・教員・産業界の交流活動の経験を活かし、次の目的・目標を達成すべく、博士フォーラムの支援を行った。

- 1 博士フォーラムを通じた、「21世紀の日本を支える人材(人財)の育成」への貢献。
- 2 来年度の博士フォーラム等への活動の継続性、発展性の担保。

2. 支援内容

1 プログラムの企画支援:

実行委員との打ち合わせ、メール交換を通じて、討議テーマ、基調講演者、参加者の募集基準などの検討を支援。

2 アドバイザーの手配:

UCEE 会員等へ参加を要請(産業界11名、教員1名)

3) フォーラム当日の支援:

アドバイザーによるポスターセッション質疑、グループ討議での助言

3. 結果

フォーラムは成功し、当初の目的・目標は達成できた。(実行委員会による報告書参照)

4. 今後の課題(来年度のフォーラムに向けて)

1) 予算管理のための前提整理・明確化:

2) 連合会・幹事校・UCEE ネットによる早期のキックオフ:

本年度は7月にキックオフしたものの、準備期間としては不十分であったと認識。より早期に準備を開始することでテーマ設定、基調講演者・アドバイザーの選定・依頼、各校参加者への案内と参加者の動機づけ等を、より円滑にし、かつ質的に向上できるものとする。

3) 学生(幹事校、各校)の動機づけ:

来年度幹事校はもとより、各大学において、本年度参加の教員・学生・アドバイザーから、来年度参加者へのFace to Faceでの動機づけ、フォローが重要と思われる。

4) フォーラム終了後(報告・成果)の各方面へのフィードバック:

本年度のグループ討議からも、いくつか重要な提言がなされている。これらを連合会の今後の活動に反映し活かすと共に、来年度のフォーラムで更に発展させていくことも必要。また、予め、フォーラムのアウトプットが活かされるような仕組みづくりの検討も必要。